

教員養成GPは目標でもあり、始まりでもある

2005年度も、あと少しで終わろうとしています。人間関係研究センターにとって今年度の大きな出来事は、やはり平成17年度文部科学省大学・大学院における教員養成GPの本学申請が採択されたことです。全学あげてのプロジェクトですが、その活動の母体としては人間関係研究センターと大学院教育ファシリテーション専攻が中心となって遂行しております。申請代表者となっている私としては、これまでの私どもの学校教育現場に対してラボラトリー体験学習を導入することが学校教育、とりわけ人間関係づくりに貢献していること、さらにはこうした教育活動をさらに大きく展開していくことが現在の子どもたちが抱える諸問題の解決に少しでも近づくことができるといった夢の事業を申請書に描きました。その結果、本プロジェクトが採択され、今はその夢に向かって、多くのセンター員と教育ファシリテーション専攻の教員と院生、そしてセンターの事務局スタッフと共に力をあわせ、一步ずつ目標達成に向けて歩んでいるところです。

これまでに公開講演会として、第1回は、星野欣生南山短大名誉教授を迎えて本プロジェクトの基調講演として『ひとりひとりのプロセスを大切に』－学校教育とラボラトリー体験学習－と題しての講演会を実施し、第2回は倉戸ヨシヤ先生（関西大学教授）をお招きして『グループ・アプローチの魅力と課題』－教育や心理臨床への導入を試みて－と題して教育におけるグループアプローチの意義を語って頂きました。第3回公開講演会では、第一部として文部科学省大臣官房政策評価審議官 樋口修資氏に「新しい時代の学校教育と教師力」、第二部として本プロジェクトの核となっている教育実践校の小牧市立応時中学校の采女隆一氏と舟橋孝司氏に「2006 体験学習奮闘記：豊かで潤いのある学びを育むために－学校教育にラボラトリー方式の体験学習を導入して－」と題して報告して頂きました。これらのお話は、学校現場における教員にとって強いインパクトを与えて頂くことができたと思います。

一方、教員養成GPの事業としては、愛知県下の小・中学校に研究協力校を募り、「ラボラトリー方式の体験学習」を学校教育現場に導入し、子ども達同士や教師と生徒、教師同士の間人間関係づくりを試みることに、子ども達の学ぶ力を育成することなどの教育実践をサポートすることを計画しています。1月中旬に、「ラボラトリー方式の体験学習ワークショップ」を開催し、83校141名の学校関係者が集いラボラトリー体験学習を紹介することができました。その中から、12校（小学校2校、中学校10校）から研究協力校の申請があり、12校すべてを2006年度の研究協力校として採択させて頂きました。2006年度学期のスタートから新しい教育の試み「体験学習を用いた授業展開」が実施できるように、現在準備しているところです。

これらのことは、まさに私ども人間関係研究センター員にとって一つの目標であり始まりでもあります。このGP事業の目標達成のために、センター員自身が米国NTLを中心として研修に参加したり、国内での研修に参加したりして研鑽をはじめております。まさに、この教員養成GP事業を大きなきっかけとして私どもが地域社会に開かれ貢献することができるさらに充実したセンターになるための試練のスタートでもあると考えています。

今まで以上に、広く地域社会のニーズに応えられる研修会の開催や、またさまざまな機関からの人間関係に関わる諸問題の解決に向けての要請に応えるコンサルテーションの充実、そしてそれらの研究成果の公刊としてのこのような紀要の発行など、ますます本センターの任務は重くなってきています。それらに応えるためにもセンター研究員は、一人ひとりが責任をもち、教育実践と研究活動に取り組んでいきたいと考えております。

今後とも、読者の皆様方のご指導・ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

南山大学人間関係研究センター長 津村俊充



撮影：荒木孝司氏

(C)KOJI ARAKI Art Works 2005-2006 arakiai5@mac.com